

「工芸建築」展

日程 | 2017年11月7日(火) - 11月19日(日)

時間 | 10:00-18:00 (最終日 17:00 まで)

会場 | 金沢 21 世紀美術館 市民ギャラリー B1・B3

「工芸建築」展の開催にあたって

「金沢 21 世紀工芸祭」総合監修 秋元 雄史
(東京藝術大学大学美術館館長・教授
金沢 21 世紀美術館特任館長)

金沢ではこの数年間、金沢まち・ひと会議というグループが中心となって、「工芸建築」という話を進めてきました。

かといって、何か結論めいたものが出ていたり、何か形になっていたりするわけではありません。工芸の現代的展開を考えたときに、これまでの工芸のイメージみたいなものをいったん分解して、自由にして、現代アートやデザインだけでなく、建築とも結びつけていけば新しい可能性を展開できるのでは、という考えで始まったものです。

ここで、「工芸」と言っているものは、できあがった形や作品ではなくて、工芸的な取り組みや、美意識的な面もありますが、それ以上に工芸的な技法や材料への興味であり、その現代的な展開が見たいのです。

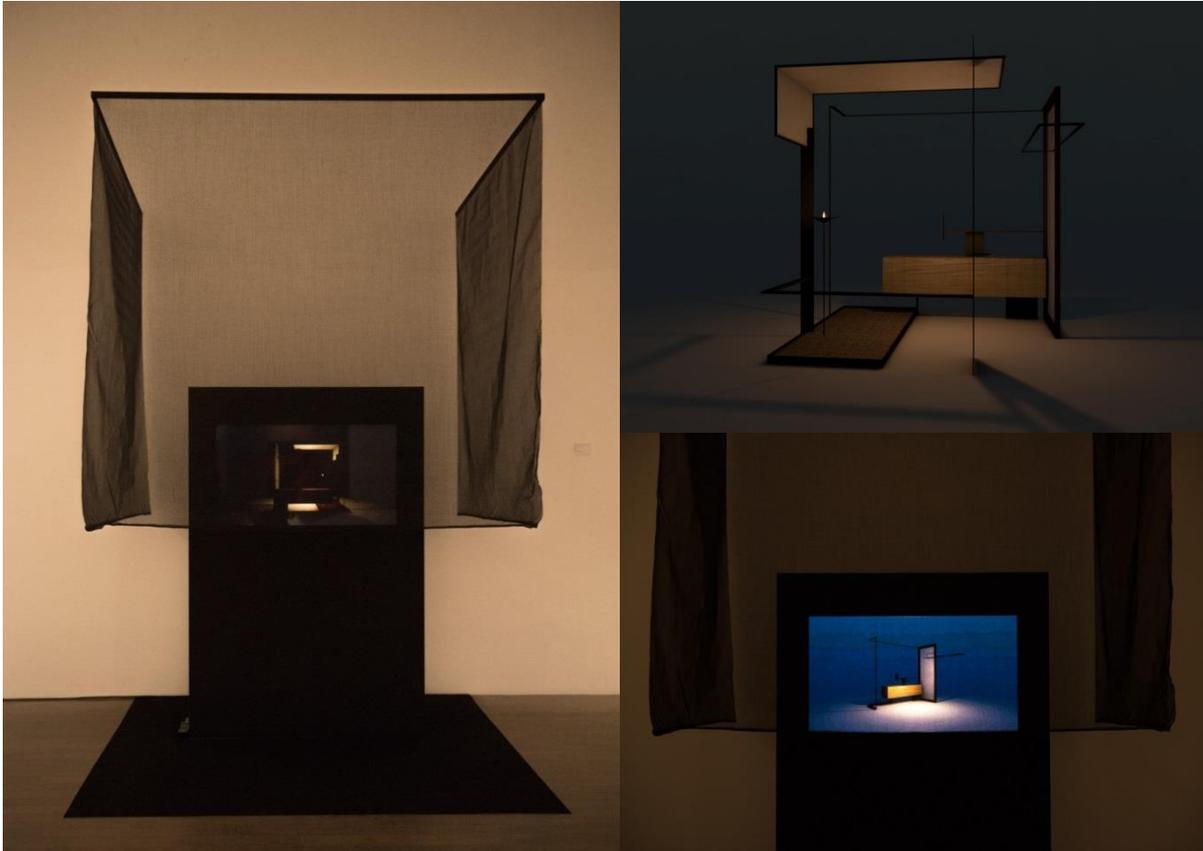
「工芸建築」という言葉と実践をめぐる試みの狙いのひとつは、ものづくり（建築的、工芸的）の方法を見直すことです。材料から生産までのものづくりのサイクルを見直す契機としたい。モダニズムの生産システムに影響を受けた建築と、前近代的なものづくりの姿勢を保持する工芸とを比較して、乗り越えることができるかどうか。同時に、工芸と建築に張り付く概念を変え、作り方も変えることができれば面白いと思っています。

スケールもアプローチも違うものですが、なぜかこの金沢という場所では、工芸も建築もあるひとつの美意識みたいなもので結びついているように感じられます。そんな金沢で、「工芸建築」という試みは、アグレッシブで自らを解体することを厭わないようなイマジナリな自由さを、ふたたび工芸の中に持ち込んでいくのではないかと思います。工芸か、建築か、アートか？ そうした垣根のないところに、新しい問いが立てられるでしょう。

今回の試みを通じて、工芸や建築の別の可能性が始まることを期待しています。最後になりましたが、開催にあたりご協力を賜りました関係各位と、出展いただきました方々に、あらためてお礼を申し上げます。

三才 - 天・地・人

緒方 慎一郎 | デザイナー



天地は陰陽が分かれたもの、その間に人が配置され万物は調和を保つ。一部の天井と床から見えない壁が現れ、空間が浮かび上がる。2つの工芸が組み合わさることにより、その間に現れる空間を建築と捉えた。

素 材 | CG パース

サイズ | W1000 x D400 x H1800mm (ブラックボックス、42インチモニター埋込)

工芸建築とは（インタビュー原稿）

工芸建築と聞いて、最初は茶室に代表される「数奇屋」のような建築のことかなとも思いましたが、そもそも工芸とは実用品に芸術的な意思を施したもので、機能性と芸術的な美しさを融合させた工作物のこととし、建築は含まれないと定義されています。そこで今回試みてみたものは、二つの工芸工作物が合わさった時、その間に生まれる空間を建築と定義できないかなということでした。「天と地」と名付けた二つの工芸の間に人が入る、これはまさに天地人という三才という考えをコンセプトに二つの工芸の間に人が身を置いた時に目には見えない空間が現れる、今回はこれを工芸建築と考えてみました。

緒方 慎一郎 | デザイナー

かたがらん？

山下 保博 | 建築家



どんなものにも触感があり、どんなものにも光との対話が必要だ。
どんなものも建築的構造になり、どんなものも人間を包み込める。
この持運び可能な光のゆらぎを、あなたの心の芯で感じて欲しい。

素 材 | 手漉き和紙、漆

サイズ | W1500xD1500xH2400mm

協力者 | 石川 まゆみ、乙坂 譜美、孫 智青、Lara Abi Saber、山下 風太、江畑 隼也、Etienne Lombard

工芸建築とは（インタビュー原稿）

工芸建築とは、という問いに対して、私は工芸と建築の違いは3つあると思っています。

1つ目は、工芸になく建築にあるものとして、人の営みを常時包み込む空間が存在するということ。
2つ目は、工芸になく建築にあるものとして、持続性可能な地震や風に強い構造体を持つことです。
3つ目は、工芸にあって建築にないものとして、可動性があり、場所に限定されないということだと思っています。建築は場所が限定されます。

この工芸と建築の違いを話すことが工芸建築のあり方かと思っています。

今回は、工芸的なものが得意の分野、建築的なものが得意な分野、を癒合したり、少し距離をあけたり、それぞれの自立性を担保したもの。それが工芸建築のあり方だと思っています。このプロジェクトに関しては、手漉き和紙の石川まゆみさんのものを利用させていただきました。その工芸的な素材からスタートして、建築の原点であるブロックを形作って積み上げていきました。その積み上げ方としては、例えば加賀の竹や加賀の織り物などを参考にしています。それを形作る時には、柔らかい和紙の強度を増す為に、漆の化学反応を利用していくつもの積層も行っています。柔らかくゆるやかな小さなオブジェクトができたかと思っています。それは人が滞在できる空間でもあり、軽さゆえに移動することも可能なオブジェでもあり、「工芸× 建築」のはざまにあるものとして存在し得たのではないかと思っています。

山下 保博 | 建築家

工芸による建築の再構築

吉村 寿博 | 建築家 X 浦建築研究所 | 建築設計事務所



古い建物を軸組・構造フレームまで解体し、工芸の素材を用いて空間を再構築する。その素材は現時点でギリギリ実現可能な最先端の技術でつくられ、空間を構成する様々な要素となる。既存の軸組の枠を超えた空間形成の在り方や連続の仕方を実現可能とする。

素 材 | 木、紙、漆、鉄、陶、硝子

サイズ | W1200xD1200xH500mm

工芸建築とは（インタビュー原稿）

工芸と建築の共通点は常に技術革新を繰り返していることだと考えています。歴史的に脈々と受け継がれてきた工芸や建築はその時代における最先端の技術を駆使して、時代の一步先を切り開いてきました。工芸建築について考えるということは、工芸と建築というそれぞれの定義を一旦外し、すべての要素を並列に見ることで、新しい側面が浮かび上がってくる行為だと捉えています。現代における最先端の技術を用いて、工芸と建築の要素を再構築すると、そこには新しい価値を持ったしつらえが出現するのではないかと考えています。それは工芸的なものであったり、建築的なものであったりするかもしれませんが。あるいは、道具のようなものであったり、ただ場所があるだけのものなのかもしれません。金沢の街に工芸建築が埋め込まれる姿を想像しています。それは一見して革新的なものだとわかるものかもしれないし、街の中に溶け込み、よく見ないとわからないものかもしれません。工芸建築が街の中に存在することで、工芸と建築の新しい価値観を切り開き、街の価値を高めていくことを期待しています。

吉村 寿博 | 建築家

用と美

坂井 直樹 | 金属造形作家



「用」から「美」へ変換。そしてその「美」を新たな「用」へと再構築。

素 材 | 鉄、和紙、鉄粉、漆、ウレタン

サイズ | $\Phi 250\text{mm}$

協力者 | 山下 保博

工芸建築とは（インタビュー原稿）

人は工芸に「用」だけを求めたのではなく、「美」を求めた。

人は建築に「機能」だけを求めたのではなく、「美意識」を求めた。

つくり手は、その求められた「感性」に対し、「つくる喜び」を手に入れた。

いつの時代も、この関係性が「人」と「もの」を繋ぐ高い芸術精神を育んできたと思います。

つくり手は「モノ」をつくり、使い手は「コト」をつくる。両者がいてはじめて「物事（モノゴト）」が育まれていく。

「工芸」も「建築」もプロセスやアプローチこそ違うが、着地点として、用と美に対する価値観を包み込む「器」としての機能を備えると考えます。その「器」を介することで、美に対する憧れと、つくる喜びが人間的環境の源となり、人間性の発露と場となると考えます。

「工芸建築」とは、使い手にとって「もの」を吟味し、隅々まで把握でき、見ること、使うこと、手に入れること、そして生活すること、その理想を示す総合芸術として成り立つものなのではないだろうかと考えます。工芸建築を通じてその文脈や背景を知れば、愛着も深まると思います。

そんな工芸建築の可能性を感じとってもらえればと思います。

坂井 直樹 | 金属造形作家

工芸が工芸であることを、建築が建築であることをやめた工芸建築

中村 卓夫 | 陶芸家 X 小津 誠一 | 建築家



金沢市内小立野台地に実在する廃墟化した町家を題材に工芸建築的リノベーションを計画した。「建築が建築であること」をやめたかの様に極限まで解体された木造躯体に、土地の土を焼き上げた<壁>を嵌入させる。その壁は、さらに床や天井へと展開し「工芸が工芸であること」をやめたかの様に工芸のスケールを越えた器=空間へと変質していく。それは、建築が根源的にもっていた土着性・同調性を取り戻す試みであり、工芸が根源的にもっていた身体性・空間性を拡張する試みでもある。

素 材 | 土、竹、木材、モデリングペースト、スチレンボード、紙
サイズ | W2000xD2000xH2100mm

協力者 | 株式会社家元 羽田 和政、左官工房山岸 山岸 賢二、石川工業高等専門学校建築学科 熊澤研究室 (熊澤 栄二、小林 桃子、佐々木 玲、笹嶋 あゆみ、中 萌乃、吉田 祐子、バトボルド・バラス、山邊 奈生)、E.N.N./studio KOZ. 吉川 正美

工芸建築とは (インタビュー原稿)

僕は、日本家屋の床の間は「うつわ」そのものだと思ってますし、「空間を仕切る」屏風も「うつわ」だと思っています。だったら「壁」も「器」 / 「器」も「壁」で良いと考えて、〈うつわ〉を作っています。

もともと、花入れや、水指とか、茶道具と言われるモノを作る中で、茶室との関係、空間との関係を意識しながら作ってきました。水だったり、花だったり、ナニかを入れる為に在る空っぽのスペース。

一方、建築のその床、四方の壁、そして天井に囲われたナニもない空間。まさに、そこが現在の空間。うつわの持つ空間と建築の空間をイコールと考え始めています。

これまでは、「壁」を「うつわ」の向こう側に置いてみていたのですが《工芸建築》では、一步建築へ踏み込んで、「壁」から「うつわ」を考えてみました。

中村 卓夫 | 陶芸家

工芸建築というコンセプトについて、普段建築に携わっていますが、建築とは土地や地域の歴史、あるいは風土、文化などの固有性が反映されるものが建築であり、不動産としてその地にあり続けることで、面的なエリアや地域にも影響や価値を与え続けるものが建築だと思っています。

しかし、日本では法定耐用年数ですとか経済の合理性によって建築が壊され続け、その新陳代謝は地域や文化による多大な影響を及ぼしながら、まるでリセットされるようにスクラップアンドビルドが繰り返されています。一方、工芸は先端的な人が作る表現としてのある種の表現だと思っています。

建築と違い、動く資産、動産として、たとえ同じ素材であっても作り手や所有者によって存在価値が変化したり、受け継がれていくのが工芸かと思っています。しかし工芸という作品はその作られた地域との関連性を失って、可搬性があるゆえに、どんな使われ方をされるのかすらわからない。

どこかへ移動してしまうというのが工芸の宿命でもあるかと思っています。

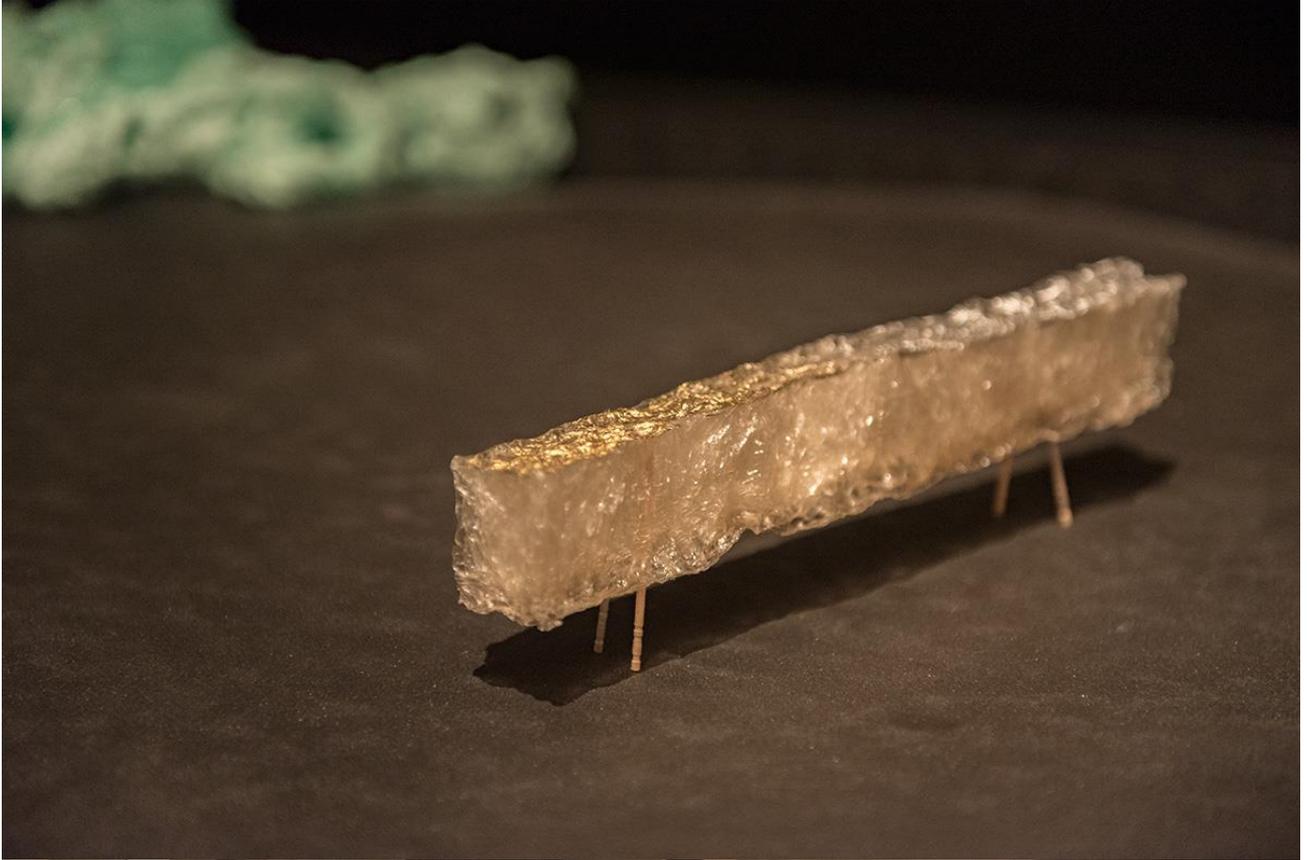
そんな中、今そういった工芸と建築を掛け合わせることで、何か新しい表現の活動が生まれませんか、それが都市、町の文化や産業にある種のインパクトを与えることができないか、そんなことを夢見て特定の表現や形のジャンルではなくて、工芸建築を新たな表現活動と捉えてみたいと思っています。

そしてそれが経済合理性を至上とするような現在の都市や町に対抗する表現になっていけばいいなと思って模索をしているところです。ちなみに今回僕が取り組む工芸建築展の模型は、普段、建築設計や不動産仲介という活動をしているので、リアルで実体のある空間作りを通して工芸建築を考えてみたいと思いました。そこで今回の展覧会では実在する廃墟化した町やそれを題材として工芸建築的なリノベーションを施すという想定のもとで模型を製作しています。

小津 誠一 | 建築家

光るる

三代・西村 松逸 | 漆工



金色堂は建築でも工芸でもなくお堂。茶室は茶碗と同じく道具。人は道具と同化し、境目なく生まれくる何かが美。機能は身を引き美を提示される。月光に浮かび輝く白く曖昧な空間。寒天、断熱・軽量・半透明の「ふわぁ〜ん」としてそこに在る。

素 材 | 寒天

サイズ | W280xD30xH70mm, W600xD30xH1200mm

工芸建築とは（インタビュー原稿）

芸術の芸も術も工のための手段であると思っていますので、工芸という言葉にはずっと違和感を持っています。ただ秋元館長発案の新しく工芸建築という概念を作ることにはとても大きな可能性を感じています。中尊寺金色堂内部は全て蒔絵や螺鈿で飾られ、私にとって金色堂は建築でも工芸でもなくお堂です。そこには工芸だとか建築という境目はなくただお堂があると私は思うのです。

茶室も建築ですが茶碗や棗と同じく道具とも言えます。主格、道具が渾然一体境目がなくなり生まれてくる何かに美しさを感じます。それが工の本質であり美だと思っています。ただの竹で作った茶杓が何十万何百万円もすることに納得できないとよく耳にしますが、竹という素材の機能と美を発見し実用に成したところに意味があり、その茶杓の竹は機能や美しさにおいて図り知れない選別がなされています。機能を含む美を切り取って提示されているところに意味があると思うのです。それが「工」ということだと考えています。

民芸の多産の中に生まれる美は茶の湯にも取り上げられています。機能と美を十二分に共存発揮させている意思と行為が美であって、私にとって工芸とか民芸とか建築は同じことでそこに境目はありません。しいの木迎賓館から金沢城を望んだ空間に工芸建築を考えました。月光に浮かび輝く白く曖昧な空間。人との境目もないような。選んだ素材は寒天で断熱性も高く軽量、半透明。ふおんとそこにあつたらなあと。中に入り込めたらなあと。その自然素材に自然素材をコーティングし更に強度もあるものにしたとを考えています。

三代・西村 松逸 | 漆工

三角屋根の小屋

眞壁 陸二 | 画家+HIPSQUARE | 建築家



雪の降る地域で多く見られる急勾配の三角屋根の家の構造を使い、「絵画の屋根」をテーマに作品を制作。屋根は土地の記憶を掘り下げた内容の絵画を断片的に描き無秩序に繋ぎ合わせて壁面全体をパッチワーク状に貼り巡らせている。

素 材 | 木材に塗装

サイズ | W1800xD1800xH1800mm

工芸建築とは（インタビュー原稿）

最初に、私は工芸家でも建築家でもありません。

絵画を主な表現手段とする画家で、現代美術家です。

でもここ数年キャンバスや紙に描くだけでなく、描く対象が家一軒丸ごとという作品を各地の芸術祭などで作っています。

絵画が家サイズまで巨大化すると絵画空間そのものに入っていけるような感覚になります。

巨大な絵で空間全体をインスタレーションすればきっと面白い作品ができるとそう思いました。

例えば昔の古いお寺や教会やモスクのその壁画や装飾は、現代的に解釈すれば空間インスタレーションです。

それらの建築物は建築そのものが工芸であり、彫刻であり、絵画でもあります。技術と知恵を結集させた総合芸術だと思います。

それを今の絵画と建築で作れば、どういうものができるかということを考えています。

近代では細分化された専門家が独自性に向かっていったそういう時代だと思います。

だけど現代においてはもう一度、協力し合えるところは協力し、ジャンルを越えたコラボレーションをする時代だと思っています。

現代アートや現代工芸はそのもだけで完結して成立するものではなく、場所そして建築に深く結びつくことにより、その力が二倍にも四倍にもそれどころか、何十倍にもなるそんな可能性を工芸建築は持っている。そう思っています。

眞壁 陸二 | 画家+HIPSQUARE | 建築家

うつわ

宮下 智裕 | 金沢工業大学環境・建築学部 准教授

X 坂井 直樹 | 金属造形作家 X 村本 真吾 | 漆造形家



竹のチップを入れるうつわを鉄で作る。そのうつわは大きなくぼみを持ち、人がすっぽりと入れる。竹チップの発酵による熱はうつわの鉄を伝わって温かく人を包む。漆芸によるあたたかみと設備による温かさが融合し空間を生む。

素 材 | 鉄、漆、カシュー樹脂、竹チップ

サイズ | W600xD1500xH1200mm

工芸建築とは（インタビュー原稿）

もともと工芸と建築というのは、その土地の素材があり、それを使う技（技術）があり、更にはそのものの機能、更にはそれを支える文化というものがある。この2つに共通するものが非常に多くあるということから、非常に似通ったルーツがあるものではないかというように考えています。

近代以降の建築で言いますと、非常にわかりやすい意味でいう、確率化？であるとか経済性、工業化、いろいろな要素が入ってくることによってそこに本来あったはずの豊かさとか文化とか、そういったものが薄れてきてしまっているのではないかと感じています。

工芸の方を考えてみても、作品の作家性であるとか、技が際立ってくることによって、本来あったはずの機能というものが非常に曖昧な部分が出てきている。

この状況に対して、もともと同じルーツから違う形を持って育ってきているこの2つの、一見、時には弱点とも見えるようなものであっても、そういうようなものを現代的に両方を重ね合わせたり、クロスさせたりして再構築することによって今までになかったような工芸建築という新しいものが作り出せるんじゃないかという期待を持っています。

宮下 智裕 | 金沢工業大学環境・建築学部 准教授

1/f

村本 真吾 | 漆造形家



工芸と建築の始まりは、自然素材を用いて人の手で造るという点で共通していると考えます。自然素材が持つ規則性と不規則性の調和、技による必然性と偶然性の融合に着目し展開を試みる。

素 材 | 漆、麻紐、地の粉

サイズ | W900×D900xH2400mm, W900×D900xH2400mm

協力者 | 山下 保博

工芸建築とは（インタビュー原稿）

今回は初めての試みで建築を工芸と捉え、新しい可能性を考えるというテーマのもと、私たちは研究を行ってきました。

私が考える工芸と建築の始まりは人の手で作るという面では共通していると思います。

人が生きていく上で必要な衣食住、いわゆる住空間、食、衣類などは全て手作りでした。

時代の流れに応じてそれぞれ変化し、建築は需要に応じて利便性や合理性、低コスト、量産性を求め、進化と捉えて手作りから工業化していきました。

素材は気から土、コンクリート、鉄など、より強度を考慮して変化していきました。

また工芸は多少の変化はあるものの、大きく変わることはなく自然素材を用いて、人の手で作ることを工業化する前の？高度な技術を要したものが伝統として色濃く残っています。

私が着目したところは住空間に自然素材を用いて手作りで作る部分を設けることです。

そこで改めて自然素材や手で作るものは人に何を与えてくれるのかを考えてみようと思いました。

例えば木の木目は規則性と不規則性が調和されている揺らぎがあり、人に暖かさや安らぎ、癒しを与えてくれます。

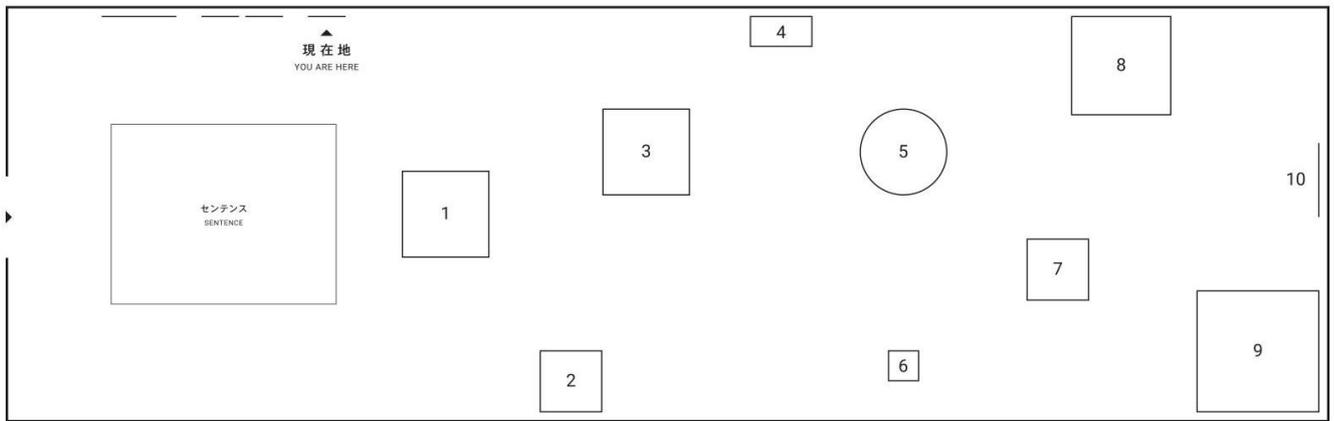
そして工業製品には決してできない偶然性と必然性の融合が人の手で作ることによって生まれ、自然素材と同様に揺らぎがあり、暖かさ、癒し、安らぎがあるのではないかと考えています。

村本 真吾 | 漆造形家

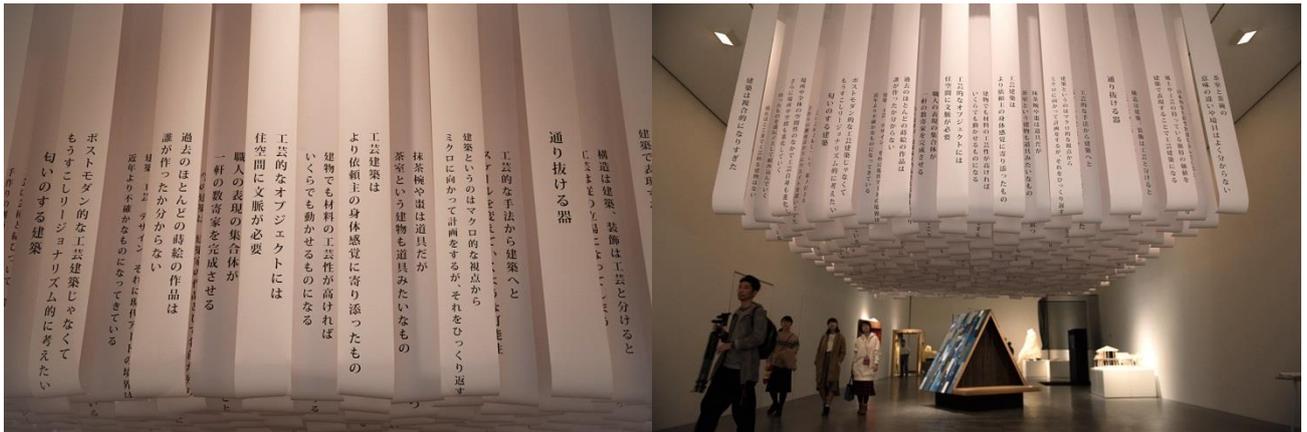
参考資料 ①

会場構成

- | | | | | |
|---|--|-------------------------------|--|--------------------------------|
| 1. 眞壁 陸二 + HIPSQUARE
Rikuji Makabe + HIPSQUARE | 3. 三代・西村 松逸
Syoutu Nishimura III | 5. 村本 真吾
Shingo Muramoto | 7. 坂井 直樹
Naoki Sakai | 9. 山下 保博
Yasuhiro Yamashita |
| 2. 吉村 寿博 × 浦建築研究所
Toshihiro Yoshimura × Ura Architects Ltd | 4. 宮下 智裕 × 坂井 直樹 × 村本 真吾
Tomohiro Miyashita × Naoki Sakai × Shingo Muramoto | 6. 緒方 慎一郎
Shinichiro Ogata | 8. 中村 卓夫 × 小津 誠一
Takuo Nakamura × Seichi Kozu | 10. 作家インタビュー
Interview |



Exhibition design by totem



入口 オブジェ (センテンス)

プロフィール



緒方 慎一郎 Shinichiro Ogata
デザイナー Designer

1998年、SIMPLICITY設立。
「現代における日本の文化創造」をコンセプトに、自社ブランドとして和菓子店、和食料理店、プロダクトブランドを展開。建築、インテリア、プロダクト、グラフィックなど多岐にわたるプロジェクトにおいて、デザインやディレクションを手がける。



山下 保博 Yasuhiro Yamashita
建築家 Architect

1960年、奄美大島生まれ。
芝浦工業大学大学院修了後、設計事務所を経て1991年に独立。都市の狭小住宅にてar+d世界新人賞グランプリ、英国LEAF Awards 3部門最優秀賞、日本建築家協会賞、日事連建築賞、ARCASIA金賞受賞ほか多数。震災の復興を支援するNPO法人理事長、九州大学非常勤講師も務める。



浦 淳 Jun Ura
建築家 Architect

1966年金沢市生まれ。
大阪工業大学工学部建築学科卒業後、大手建設会社を経て、1993年(株)浦建築研究所入社。現在、同社及び(株)エチカ代表取締役、日心企画(大通)有限公司 董事長、認定NPO法人趣都金澤理事長。



小津 誠一 Seiichi Kozu
建築家 Architect

1966年、金沢市生まれ。
武蔵野美術大学建築学科卒業後、建築設計事務所、専らを経て独立。2003年E.N.N.を設立後、金沢R不動産、飲食店などを立ち上げ、2012年より金沢を拠点に建築、不動産、飲食などのチームを率いて活動。



坂井 直樹 Naoki Sakai
金属造形作家 Metalwork Artist

1973年、群馬県生まれ。
2003年、東京藝術大学大学院博士後期課程造金研究室修了、博士学位取得。2005~08年、金沢卯辰山工芸工房にて研修。2013年~金沢卯辰山工芸工房専門員。現在、金沢市内にて制作活動を行う。



中村 卓夫 Takuo Nakamura
陶芸家 Ceramic Artist

1945年、金沢市生まれ。
父・中村梅山に師事。銀座と光ホールをはじめ個展多数開催。NYメトロポリタン美術館、シカゴ美術館、金沢21世紀美術館など収蔵多数。



三代・西村 松逸
Syouitu Nishimura III
漆工 Urushi Artist

金沢市生まれ。
祖父・初代西村松逸、父・二代松逸に学び、人間国宝 大場松魚氏に師事。2000年頃より公募展等への出品をやめ、その後日本芸会(正会員)を退会。たおやかさと新しい表現を求め模索。竹取・平家・源氏物語、古事記などの古典をテーマとした制作も行う。



眞壁 陸二 + HIPSQUARE
Rikuji Makabe + HIPSQUARE
画家 Painter / 建築家 Architect

1971年、金沢市生まれ。
多摩美術大学油画専攻卒業。ベイスギャラリー(東京)、トライアンフギャラリー(モスクワ)、等で個展。近年は瀬戸内国際芸術祭、奥能登国際芸術祭など家全体を作品化するプロジェクトに関わる。



宮下 智裕 Tomohiro Miyashita
金沢工業大学環境・建築学部 准教授
Associate Professor
Kanazawa Institute of Technology

1968年、静岡県生まれ。
南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)修士課程修了後、芝浦工業大学大学院工学研究科において博士(工学)号を取得。
現在、金沢工業大学環境・建築学部建築デザイン学科准教授。専門は構法デザイン。



村本 真吾 Shingo Muramoto
漆造形家 Urushi Artist

1970年、白山市生まれ。
東京藝術大学大学院美術研究科漆芸を修了し金沢卯辰山工芸工房で研修を行う。ギャラリーを中心に個展、展覧会多数開催。近年はイタリア、スイス、モナコなどアートフェアを中心に海外で発表。韓国、シンガポールなどコミッションワークも行う。フィラデルフィア美術館、ミネアポリス美術館など収蔵多数。

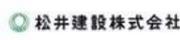
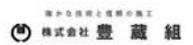
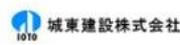
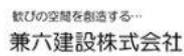
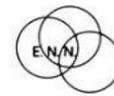
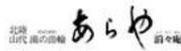


吉村 寿博 Toshihiro Yoshimura
建築家 Architect

1969年、鳥取県生まれ。
横浜国立大学大学院修了。1995-2004年妹島和世建築設計事務所・SANAA勤務。金沢21世紀美術館の担当時に金沢の魅力に引き込まれ、2004年東京より金沢に移住し吉村寿博建築設計事務所設立。

参考資料 ③

御協賛会社



来場者数

no	日程	曜日	全体	日本人	外国人
1	11/7	火	1,074	994	80
2	11/8	水	731	647	84
3	11/9	木	595	529	66
4	11/10	金	763	661	102
5	11/11	土	1,739	1,509	230
6	11/12	日	1,563	1,486	77
7	11/13	月	281	261	20
8	11/14	火	982	894	88
9	11/15	水	667	583	84
10	11/16	木	956	836	120
11	11/17	金	669	595	74
12	11/18	土	2,040	1,906	134
13	11/19	日	1,955	1,899	56
			14,015	12,800	1,215

掲載誌

(上：北國新聞、下右：北國新聞、下左：北陸中日新聞)

北 國 新

建築と工芸 響き合う

金沢21世紀工芸祭

21世紀 鷹峯フォーラム

地元作家11人が表現 21美で初の展覧会



「工芸建築」は作家の創りで、金沢で数年前から議論を醸成し、意を建築と工芸に解き放たれ、建物に工芸としての価値を持たせようという考え、可能性を

「工芸建築」は作家の創りで、金沢で数年前から議論を醸成し、意を建築と工芸に解き放たれ、建物に工芸としての価値を持たせようという考え、可能性を

「工芸建築」は作家の創りで、金沢で数年前から議論を醸成し、意を建築と工芸に解き放たれ、建物に工芸としての価値を持たせようという考え、可能性を

「工芸建築」は作家の創りで、金沢で数年前から議論を醸成し、意を建築と工芸に解き放たれ、建物に工芸としての価値を持たせようという考え、可能性を



個性あふれる作品が並ぶ「工芸建築」展。7日、金沢市の金沢21世紀美術館で「白野及湯影」

工芸+建築 融合の世界

「工芸建築」をテーマに建築家や陶芸家、画家らが自由に発想した作品の企画展が7日、金沢市の金沢21世紀美術館で始まった。金沢21世紀工芸祭（北陸中日新聞協賛）の一環。工芸と建築を結び付けることで、ものづくりのあり方を見つめ直すことを狙う。19日まで。

展示室の天井からいくつも垂れ下がった白い幕に「建築は複合的な芸術表現」などと書かれている。アートや建築関係者らでつくる「金沢まち・ひと会議」で議論されたキーワードで、企画展はその発想を形にし

ようど初めて開かれた。画家の眞壁陸二さん（金沢市）と建築家「HIPS SQUARE」（富山市）は、雪国に多い三角屋根を作品にした。屋根には「土地の記憶を掘り下げた」森や波などが描かれている。陶芸家の中村卓夫さん（金沢市）と建築家の小津誠一さん（同）の作品は老朽化した町家を題材にした。町家の土壁を仕上げるプロセスを見せ、その壁に鮮やかな陶板を組み込んだ。「建物以外で町家を残す方法を考えた」と小津さん。「工芸建築」展は来年以降も続ける考えで、「さまざまな工芸が集積する金沢で、これからの工芸建築を探っていきたい」と話した。（伊川恵理子）

「工芸建築」可能性を提案

金沢21世紀工芸祭（北國新聞社特別協力）の「工芸建築」展は7日、金沢21世紀美術館で開幕した。「建築を、ひとつの工芸として考える」をテーマに、金沢を拠点に活躍する工芸作家や建築家ら11人がまちと建築の美意識を形にした9点を披露し、「工芸建築」の可能性を提案した。

「工芸建築」は数年前、有志でつくるグループ「金沢21美」が中心となり、新たな概念として打ち立てた。作家の創りを建てる、光との対話を現した建築の作品、金沢市に実在する住宅をモデルに、居住者が持つ「素直なヒント」に再構築を託された。会場には、手書き和紙で染められた壁紙、ローテクな照明、光との対話を現した建築の作品、金沢市に実在する住宅をモデルに、居住者が持つ「素直なヒント」に再構築を託された。

金沢21美 地元作家ら9点披露

「工芸建築」を形にした作品を鑑賞する来場者＝7日午前10時15分、金沢21世紀美術館

「工芸建築」は数年前、有志でつくるグループ「金沢21美」が中心となり、新たな概念として打ち立てた。作家の創りを建てる、光との対話を現した建築の作品、金沢市に実在する住宅をモデルに、居住者が持つ「素直なヒント」に再構築を託された。

「工芸建築」は数年前、有志でつくるグループ「金沢21美」が中心となり、新たな概念として打ち立てた。作家の創りを建てる、光との対話を現した建築の作品、金沢市に実在する住宅をモデルに、居住者が持つ「素直なヒント」に再構築を託された。



入口 オブジェ (センテンス) 文章

- 01 もともと工芸と建築は共存していた。
- 02 ひとむかし前の近代建築や寺社仏閣は、ふつうに工芸と建築が融合していた。
- 03 中尊寺金色堂はどこをとっても工芸そのもの。現在はここまで工芸的な建物はない。
- 04 工芸的な作り方、建築的な作り方に随分と差ができてしまった。
- 05 工芸は芸術と結びついて、職人技とか手作りの側面ばかりにウエイトを置いてきた。
- 06 産業としての建築は、パーツをカタログから選択して組み立てる作業がほとんど。
- 07 建築は複合的になりすぎた。
- 08 近代的な原理では、もともと総合的に成り立っていたものをカテゴリーに分割してきた。
- 09 むかしの建築は職人に発注して依頼主と作り手がいっしょにつくっていった。
- 10 作り手と発注者が出来合の製品を通じて向き合うようになったのは近代になってから。
- 11 いまの建築は、クライアントと計画者をつくる人の3つに分かれている状態。
- 12 むかしは建築に図面はなかった。
- 13 アーキテクトという言葉は欧州から来たけど、本当に最近のこと。
- 14 かつてトータルデザインがなくても建物が全体として芸術作品だった。
- 15 建物だけでなく、街自体もひとつの芸術作品にもなる。
- 16 千利休はプロデューサー。職人をかき集めて、あるコンセプトのもとにプロデュースした。
- 17 美術や建築の世界もプロデューサーがいたり監督がいたりするかたちになる。
- 18 こういう空間を作りたいという発想から、それを成り立たせる工法や方法が構築される。
- 19 建築家の発注から技術が開発されたり、職人側から逆提案されたり、その過程のなかで相互に発展していく。
- 20 職人の表現の集合の結果が一軒の数寄家を完成させる。
- 21 各セクションを受け持つ職人は、自分の意志でものを表現している。
- 22 構造は建築、装飾は工芸と分けると、工芸は従の立場になってしまう。
- 23 プランすることと作ることは、もっと密接に一体化するはず。
- 24 工芸家は工芸家の立場で、建築家は建築家の立場でものを言うけれど、仕上がるのはひとつのもの。
- 25 今の建築は、建築家の作品として名前が残り、施工した人や作り手側の名前は出ない。
- 26 本当は施工の良し悪しが建築の質を決めている。
- 27 本当はいいものを作るという習慣は、指示を出した人間の想像を超えたものを出してくる。
- 28 工芸建築は、建築を構成するパーツを工芸作家に作ってもらうという話ではない。
- 29 建築というのはマクロ的な視点からミクロに向かって計画をするが、それをひっくり返す。
- 30 工芸的な手法から建築へとスケールを変えていくような可能性。
- 31 工芸のように素材そのものと向き合いながら建築を作っていく。
- 32 工芸で、複雑になりすぎた建築を解き放つ。

33 工芸建築は、より依頼主の身体感覚に寄り添ったもの。
34 座敷生活から西洋様式に変わっているのに、工芸作家は気づいていない。
35 工芸が近代化する過程では、どういう文脈に置かれるのがよいかはいつさい考えられていない。
36 皿や壺のかたちになっているだけで、それを置ける家はどこにもない。
37 工芸的なオブジェクトには、住空間に文脈が必要。
38 モダンな建築空間のなかで工芸的な実験をする。
39 建築との関係、空間との関係を抜きに作品を発想していく根拠はない。
40 場所や全体の空間性のなかで工芸自身も進化し、さらに場所や空間も進化していく。
41 職人こそ、時代というものに敏感に反応しないとイケない。
42 作家は今の時代が何を表現しようとしているのかを自分のものにしたい。
43 時代の解釈、あるいは、時代の表現として、工芸建築を定義づけたい。
44 工芸の技術とは、限りなく身体化していくこと。
45 経験して自分の中に身体化していくことで工芸性は体現される。
46 工芸では、技術だけが身体化するわけではなくて、そこにある種の精神を宿す。
47 近代的なフレームの中に、前近代的なマインドを持ったものを遺伝子として組み込んでいく。
48 日本的な土着性を抱え込んだ工芸と、近代的にも評価されている日本建築を結びつける。
49 テクノロジーが進化していく領域と、身体性やものを作る経験とを、結びつける。
50 建築、工芸、デザイン、それに現代アートの境界は近年より不確かなものになってきている。
51 抹茶椀や棗は道具だが、茶室という建物も道具みたいなもの。
52 茶室と茶碗の意味の違いや境目はよく分からない。
53 建物でも材料の工芸性が高ければいくらかでも動かせるものになる。
54 動かせるかどうかや、屋根や柱があることは、工芸と建築を明瞭に区分けする基準にならない。
55 文化が発展するには時間がかかる。
56 工芸建築もはじめから地域活性化ではなくて、仕込み期間が必要。
57 まだ世界にはない「工芸建築」を金沢で表現したい。
58 工芸建築という新たな表現で場所を形成し、金沢の資産とする。
59 それは空き家対策やまちづくりにもなるし、新たな産業になるかもしれない。
60 廃墟化した町家の利活用と、工芸未来派の可能性が、何かリンクしそう。
61 工芸建築によって、不動産としての建築に動産的価値を見いだせないか。
62 建築は減価償却で毎年価値が落ちていくが、工芸は原価の何 10 倍にもなる可能性がある。
63 ポストモダンの工芸建築じゃなくて、もうすこしリージョナリズム的に考えたい。
64 土地から生まれた材料をどんなかたちで切り出すか、どんなふうに風化していくかを、作り手側が想像する。
65 土地を読みこむ職人的な技術が洗練されて工芸的なものになっていく。
66 茶室は、意匠だらけにならず、その土地の材料や文化や住む人の想いを建築空間にしている。
67 産地で作られるものへの違和感と、時代に共通する表現の模索から、新しい土地への解釈が生まれてくる。
68 加賀友禅や楽焼は、もともとその土地のものではなく、人を連れてきて作り上げられたもの。
69 金沢の工芸というときに、人々は誰かの「フィルター」を見ている。

- 70 工芸の場所性とは、何を材料とするか、それを使って何を作るかという、その感性のフィルターのこと。
- 71 作家性は強い必要はない。知らずに見たら、誰が設計したか分からない。
- 72 過去のほとんどの蒔絵の作品は誰が作ったか分からない。
- 73 個人名は1つのフィルターを意味する。建築の棟梁は作家以上に1つのフィルターだった。
- 74 その地域の生活の質あるいは環境の質を高めていく目線を持たないと、新しい芸術性は出てこない。
- 75 フィルターをどこに置くかは時代によって変わり、金沢には特有のフィルターが何層もある。
- 76 金沢という場所では、工芸も建築もあるひとつの美意識みたいなもので結びついている。
- 77 作る人だけでなく、売る人や使う人との近さでできる美的な倫理観のようなものが、金沢には今もある。
- 78 金沢らしさや工芸の持っている独特の価値を建築で表現することで工芸建築になる。
- 79 工芸建築を生み出そうと思ったら、世界のどこよりも金沢で一番発想できるという雰囲気を作れるかどうか。